View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

保育のなかの紙芝居
― 倉橋惣三と「紙芝居」の関わりを中心に ―

鬢　櫛　久美子
種　市　淳　子

1．はじめに

1．1　研究の背景

紙芝居は、街頭紙芝居として誕生し、大衆文化、児童文化のなかで育った文化財である。

保育界では、現在のスタイルの紙芝居が成立した 1930（昭和 5）年[1]あたりから、紙芝居を保育に取り入れようとした人々がいた。倉橋惣三や副島ハマらである。そして戦後は、学校教育から紙芝居が締め出されたのとは対照的に、保育内容にもとづく保育教材・教具として制度的に位置づけられ、現在も、紙芝居は日々の保育に欠かせない教材・教具として活用されている。

保育の場で、紙芝居と同様に活用されている教材・教具に絵本がある。絵本が子どもの個性に応じて特別な愛情のある一冊との「個」の世界を生むのに対して、紙芝居は集団に向けて演じられ、聞き手との双方向のコミュニケーションを通して「共感」の空間をかたちづくる。

紙芝居は、現代社会においてその存在意義を新たにしている。情報技術の進展とともにコミュニケーションの稀薄さが問題視されるようになり、直接的なコミュニケーションのある紙芝居の良さが見直されているからである。食育や防犯といった現代的な政策課題に対する親しみやすい視聴覚教材として、海外に日本独自の文化を発信する活動として、マスメディアにもたびたび取り上げられるようになった[2]。また、子どもの文化として生まれた紙芝居を、高齢者ケアの現場に生かそうとする試みもはじまっている[3]。

しかし、その特性や効果の検証はこれまでも、また現在においても十分になされていない。保育教材・教具としての紙芝居もまた同様であるといえるだろう。

1．2　研究の目的

本研究は、紙芝居がどのように保育界に取り入れられ、保育メディアとして位置づけられてきたかを明らかにすることを目的としている。2005年度は、その第一歩として紙芝居の歴史と保育史との接点を検討し、保育界では倉橋惣三、副島ハマらが草創期から紙芝居の魅力に注目し、保育実践に取り入れていたことを明らかにした[4]。

倉橋惣三（1882-1955）は、日本の幼児教育、保育の理論と実践に多大な影響を与えた幼児教育学者である。また、その広範な業績のうちで「見逃してはならないのは児童文化に対する貢献」である[5]。倉橋は、生涯にわたり児童文化に深い理解と関心を示し、積極的に保育実践に取り入れてきた。後にふれるように、保育項目「観察」の助けとなる『キンダーブック』の創刊と編集に深く関わったり、「お茶の水人形座」を創設して人形芝居を保育界に広めたりした。「紙芝居」に対しても早くから注目し、保育に利用できないかを研究していた。

大道芸にはじまった「紙芝居」が、今日のように保育教材・教具として定着した背景に、倉橋の影響力があったのではないだろうか。しかし、「日本教育紙芝居協会」の理事をつとめたとされる倉橋の紙芝居活動には未調査とされる点が多い。そこで本稿では、倉橋が「紙芝居」をどのように捉えていたかを起点として、その後の活動を追い、倉橋惣三と「紙芝居」の関わりを詳しく見ていくこととする。

2．「紙芝居」に対する関心

2．1　「日本の子ども」の群像として

倉橋の紙芝居に対する関心はどのようにして生れたのであろうか。まず、彼の自伝であり、最後

の著作となった『子供讃歌』[6] から見ていくこととしたい。「紙芝居」の記述が登場するのは、彼が文部省の在外研究員として 2 年間（1919 年 12 月～1922 年 3 月）の欧米留学から帰国した頃のことである。それは、「立ち絵」[7] 時代の紙芝居屋が自転車に舞台を積んで営業するスタイルが一般化した頃であった。

> 紙芝居は、まだまだポツポツ出始めの時代であった。社会的な注意もひかれないし、識者先生方も黙殺（見落し）していた。が、『日本の子供』は、自分たちのために発明されたこの日本独自の街のプロレタリアート・リクリエィションを見のがすには、あまりに娯楽は空腹であった。彼は、その子供らと共にというよりは、その子供群の中に交って午後になると街の辻に人寄せの拍子木を追い、たそがれる夕焼の原っぱに立ったものだ[8]。

『子供讃歌』に「彼」として登場する主人公は、倉橋自身のことである。倉橋の関心は、「紙芝居」そのものより、子どもの反応にあったと見られる。「彼」の紙芝居の見方は、まず前方でステージとストーリーに注意し、次に横から「子どもたちの反応を見る」という順序で繰り返し見物するというもので、時に日が没するのも忘れたという。ついには、浅草の紙芝居屋の元締の家を何度も訪問するまでに至る。その頃の紙芝居屋の多くは低級であったが、紙芝居屋が自ら楽しみながら口演する様子に強く心を引かれたとある。紙芝居屋の元締が、「あの若い者はみんな、自分で紙芝居が好きでたまらん奴らでさあ」といった言葉がいつまでも頭に残り、舞台芸術の秘訣はこれだ、子どものためにという教育的態度だけでは成功しないと思ったとあり、興味深い。

倉橋自身は、留学から帰国後、上述のように紙芝居の研究に凝った理由を、外国に出てあらためて「日本の子供」の具体的把握に強く導かれたためと分析している。留学中、ベルギーのブリュッセルで開かれた世界児童保護会議に日本代表の一人として出席した際には、しきりと「日本の子供が恋しく」なり、「抽象的対象としてではなく、あの町の子、あの村の子、あの遊び方をしている姿、あの歌をうたっている声の、日本の子供の具体的群像がなつかしく」なったとある[9]。

帰国後の倉橋は、生きた一人一人の「日本の子供」に何をしてあげられるかを考えた。彼は、子どもの目線にたって、日本の子どもの娯楽としての紙芝居を研究しようとしたのである。

2．2　家庭環境からの影響

倉橋は生涯にわたり児童文化に深い関心を寄せ、多大な貢献をおこなっている。ここでは、倉橋の紙芝居観の背景にあるものを探るために、彼の児童文化における功績のいくつかを、「紙芝居」に限定せずに見ていくこととする。

1922（大正 11）年に創刊された『コドモノクニ』では、編集顧問をつとめるほか、自らも「まがりかど」[10] など詩的な作品を創作し、寄稿している。『コドモノクニ』の編集スタッフには倉橋のほか、北原白秋、野口雨情、中山晋平、岡本帰一らが名をつらね、日本の児童文学史において『赤い鳥』（大正 7 年創刊）とならぶ足跡をのこした。

1927（昭和 2）年創刊の『キンダーブック』は、大正 15 年の幼稚園令により「保育項目」に「観察」が追加されたことに対応して、それに役立てる絵本として企画された。倉橋は、岸辺福雄、和田実らとともに創刊の立役者となり、編集顧問をつとめた。自身もほとんど毎号に寄稿しており、その編集指導は彼の死の直前までつづくなど、「この雑誌の編集に関心と努力をつづけたことはむしろ異常なくらい」[11] であった。

保育実践の場に直接的な影響を与えたものに「人形芝居」がある。1923（大正 12）年に「お茶の水人形座」を結成し、保育者向けの講習会では自ら実演するなどして、「人形芝居」を保育に取り入れて保育界に広めている。

完成芸術から大道芸能まで、倉橋のバランスのとれた芸術観と感受性は、大衆文化に始まる人形芝居や紙芝居を、保育に取り入れようと決意させたものの一つであった。その背景には、家庭環境の影響があったと見られる。

倉橋惣三は、1882（明治 15）年に倉橋家の長男として生れた。父の“政直”は、「まめの人」「多趣味の人」で、花作り、木工、釣、猟銃、弓、

俳句、篆刻、義太夫、歌沢等々に凝った。父は幼い惣三に、子供向けの園芸具や大工道具、釣り道具、小さい猟銃までを買い与え、俳句の会では母とともに仲間に入れ、母が三味線を習って父の文楽の相手をする座敷でも聞き手として座らせた。少年時代には、両親と共に歌舞伎・寄席にも出入りした。万事が「親まず凝り、子これに導かれる」といった調子で、「新しい教育法におのずから通じた」とあり、「教育を教育として行わなかった親の態度と親の共楽と信任の幸福とを感謝する」と述べている[12]。

家庭環境の影響は、倉橋の広範な文化、芸術に対するバランスのとれた感性だけでなく、後の教育観の形成にも及んでいたことが示されている。

2．3　「人形芝居」から「紙芝居」へ

倉橋の紙芝居に対する関心は、元々は「人形芝居」にはじまったといえる。1930（昭和 5）年の「人形芝居の話」[13] には、幼少期からの人形芝居遍歴が紹介されている。幼稚園の頃から家に出入りしていた芝居好きの書生と人形芝居ごっこをしたこと、小学時代に必ず立ち止まって見たという大道人形芝居、中学時代に興味をもった歌舞伎や文楽、外遊中に欧米各地で見た人形芝居のことなどである。

また、なぜ幼児に人形芝居を見せるのかという問いに対しては、「私はそれに対してただ一言、私が好きだからと答えます。すると、そんなことで厳粛な保育が出来るのかと仰るかも知れません。ところが私の宗旨は違います。自分で好きな事は見せてやりたいという常識的な考え方です」[14] と、先に取りあげた家庭環境に通ずる倉橋流の教育観を述べている。

紙芝居に対する関心は、次のくだりに出てくる。

> 最近私の興味をもつてゐるのは紙芝居といふやつです。今では昔流の大同芝居は滅多に見ません。それに代わったのが紙芝居です。此の紙芝居は、十二三年前にはじまつたものでせうか。震災後著しくなったようです。皆さんのような上流の方々は御存じないでせうが。紙芝居は飴を賣るのが目的です。太鼓と拍子木だけで、脚本は「國定忠次」とか「次雷也」「孫悟空」など。最近、この脚本を卸す元へ行つてみましたら、「新版血染小櫻」といふようなものもありました。やり方は箱舞台に孔があつて、人形は田樂式に下に串がついてゐて、口上と共に出て來た人形を孔に立てる。これが普通ので、最近新しい型として、鏡面を利用してラクに人形を動かせるのが出て居ります。人形芝居を何處迄單純化出來るかといふ點で、紙芝居には實に心服させられます。大に利用出來そうだと思つて目下研究中です。世間はいろいろの努力をして居りますね。「幼稚園では世間でしてゐることはせぬ」といふのなら意見が違ふのですがね[15]。

人形を舞台の穴に立てて動かす「立ち絵」や、鏡面を利用して背景と人物を平面に映す「かがみ」時代の紙芝居の仕組みに関心をもっていたことが示されている。倉橋の頭のなかには、「文楽」から「歌舞伎」、そして「紙芝居」へというイメージができあがっていたのかもしれない。

3．日本教育紙芝居協会における活動

倉橋は、後に日本教育紙芝居協会の理事となるのであるが、その活動ぶりはほとんど知られていない。現存する資料の少なさが調査を困難にしている。

日本教育紙芝居協会は、紙芝居を教育目的に活用しようとする動き（後に「教育紙芝居運動」と総称された）を推進するために、1938（昭和 13）年に松永健哉らにより設立され、戦前・戦中期に教育紙芝居の出版や普及を行った団体である。創設時のメンバーには、宗教学者の佐木秋夫（1906-1988）、劇作家の青江舜二郎（1914-1991）らがいた。

戦争の影響が強まると、日本教育紙芝居協会は、戦争に協力する国民教化を目的とした「国策紙芝居」の製作に専念していくこととなる。こうして製作された「教育紙芝居」（「印刷紙芝居」とも呼ばれる）は、1942 年以降に最盛期を迎え、戦前の十倍程の出版部数になる。それは、官庁や翼賛団体にその感化力を高く評価されたことから、国が買い上げて全国に配布したことにも起因する。

元々は、子どもを引きつける紙芝居の特性に注目した教育界やキリスト教界の取り組みに端を発したものであったが、その活動の趣旨は徐々にねじ曲げられた。紙芝居は、国民教化のための戦中マスメディアとして大いに利用されたのである。

3．1　雑誌『紙芝居』の記事調査

（1）　雑誌『紙芝居』

日本教育紙芝居協会は、『紙芝居』（図 1）という雑誌の刊行を行っていた。しかし、現存資料が戦中のものに限られており、創刊時の資料が残されていないため、発刊の経緯は不明である。

所蔵を確認できた中で最古号となる 1942（昭和 17）年 1 月号によれば、第三種郵便物として認可を受けたのは 1939（昭和 14）年の 3 月であり、東京市神田の一ツ橋教育会館に本部をおいていた。また、創刊時のタイトルは『教育紙芝居』であったこと、1942（昭和 17）年 1 月号より『紙芝居』に改題されたことがわかる。

上地（1997）によれば、倉橋は協会設立当初の理事であったが[16]、現存資料では就任の経緯を確認できなかった。しかし、倉橋が日本教育紙芝居協会の理事を務めたことは、これまで『子供讃歌』の数行の記述[17]に拠ったものであったが、1942（昭和 17）年 1 月号に「理事　倉橋惣三」と実際に記載されている記事を確認した[18]。

図 1 『紙芝居』昭和 17 年 2 月号の表紙（1942）

（2）　調査の概要

日本教育紙芝居協会の雑誌『紙芝居』における倉橋の言説を調べた。調査対象としたのは、調査時点で所蔵の確認がとれた資料である（表 1）。これを所蔵する機関と個人から、全記事のコピーを入手して詳しく調べてみた。

調査の結果、倉橋の言説は 3 つの記事に見つかった。全体に時局による戦時色が色濃く出ている。しかし、たとえば『子供讃歌』の情緒的な記述と比べると、倉橋の「紙芝居」観が明確に示されていると思われる点があるので、以下で順に、見ていくこととしたい。

表 1　雑誌『紙芝居』の調査範囲

発　刊　年	巻　数	号　数
1942（昭和 17）年	5 巻	1 号～12 号
1943（昭和 18）年	6 巻	1 号～12 号
1944（昭和 19）年	7 巻	1 号、3～9 号
1949（昭和 24）年	9 巻	1 号

3．2　倉橋の言説にみる紙芝居観

（1）　少国民文化の普遍性

1942（昭和 17）年 5 月号に掲載された、「街の少國民文化」[19] と題した記事は、「日本少國民文化協會創立記念特輯」として掲載されたものである。

「日本少国民文化協会」は、日本の軍国主義が強まり戦時下の児童文化を統制しようとする動きの中で、1941（昭和 16）年に創立された。会の定款によれば、「本会ハ皇国ノ道ニ則リ国民文化ノ基礎タル日本少国民文化ヲ確立シ以テ皇国民ノ練成ニ資スルヲ目的トス」とうたわれている。専門部会として、文学・絵画・童話・遊具・紙芝居・演劇・映画・舞踊・音楽・蓄音機レコード、出版の 11 分野があり、最盛期には二千人の会員を擁するほどの大組織であったが、敗戦により 1945（昭和 20）年に解散している。

ここでの倉橋は、「紙芝居」のもつ普遍性や普及性を評価する記事を書いている。芸術的にも教育的にも最高水準の絵本や玩具の重要性を認める一方で、「如何に廣く、如何に低く（假りに此の語を許して貰ふとして）一般に、全體に普遍普及してゐるかといふことも、我等の遠慮を去り得ないこと」だとして、紙芝居の特性である普及性に注目する。また、紙芝居に対する強い思いもあらわれている。

> 文化の貴族性に高踏的趣味を味はんとする所謂文化人、狭隘なる教訓性に潔癖性を樂まんとする所謂教育人は、紙芝居を目して粗野とし、卑俗とし、一概に排し去らんとさへした。確に従來の紙芝居に、その弊もあり、危儉もあつた。しかし、さういふ時代に於てさへも、あの狭路の午後、紙芝居に殺到蝟集してゐる少國民達を見ては、我等は、涙ぐましいといつていゝ程に彼等の樂しみを樂しみとし、彼等の喜びを喜びとして凝視せずにゐられなかつたのである。そして、その畫面と説明者とに屢々顰蹙させられつゝも、夕陽に浮ぶ少國民達の相重なる可憐の肩を、後ろから愛撫してやらずにゐられなかつたのである。私が、と敢へて個人的なことをいふが、實に數十年も前から紙芝居に深い關心を拂ひ出したのは、一つに、この街の少國民文化がもつ普遍性に對してゞあつた。きたない箱舞臺を半日つけまはしたのも此の魅力にひかれてゞあつた。淺草の貸元さんの家のあがりがまちに度々長々とお邪魔したのも、その秘訣を探りたかつたからであつた[20]。

ここに引用した内容は、『子供讃歌』に描かれている、子どもに交って野原に立ち、日が暮れるまで紙芝居を見ていたときの様子と重なる場面である。しかし、『子供讃歌』には見られなかった、倉橋の興味を駆り立てた紙芝居の魅力の普遍性が切々と述べられている。

（2）　紙芝居の戦争協力

1942（昭和 17）年 5 月号に掲載された「「ボクラノチカヒ」感想」[21] は、倉橋が、戦争に協力する国民教化のために行われた「軍事保護教育紙芝居懸賞募集」（図 2）の入賞作品に感想を寄せたものである。懸賞募集は、軍事保護院、軍人援護会の後援により、日本教育紙芝居協会が主催したもので、『教育紙芝居』（後に『紙芝居』と改題）の 1941（昭和 16）年 7 月号と、『週刊朝日』同年 6 月 24 日号の誌上で募集が告知された[22]。倉橋が、具体的な戦争協力を行っていたという重要な事実でもある。

軍事保護教育紙芝居
審査發表
（入選なし）
佳作一席（賞金五百圓）
「ボクラノチカヒ」
（社会科一年生）　岸　和子
佳作二席（賞金拾百圓）
（青空の歌）　越水　宏
（とりかぶと）　小原　力
特別奬勵金（壹百圓）
日本教育紙芝居協會

図 2　軍事保護紙芝居の審査結果広告

しかし、この「「ボクラノチカヒ」感想」では、軍事保護教育紙芝居の趣旨に一切ふれていない。入賞者の「この子たちもやがては忠誠なる　陛下の御盾となるのだ」[23]。といった勇ましい言葉とは一線を画すように、作品の製作過程における教育的意味を評価する感想を淡々と述べているのである。

> 此の「ボクラノチカヒ」のいいところは、どこまでもくろうと臭くないところにあるが、それは、此の一年生がもつ紙芝居の経験が影響してゐるかとも思ふのである。更に遠慮なくいへば、岸先生も、紙芝居の豪のものでないらしいところがいゝ。従つて、紙芝居の理論とか、紙芝居教育の為とかから、子どもを指導してかゝったのでなく、子どもの中に自然に流れてゐる過程の中から、子どもへの紙芝居を生れさせたのであつた[24]。

紙芝居は一般教科、一般授業の中へ、極くなだらかな位置をもたせられなければならな

い。―― といつた丈けでは、よく分からないか知れないが、嘗て流行した學校劇とか教室劇とかの場合、あの教育的なだらかさを欽いた、まるで教育を獨占でもするやうな、一種の出過ぎを避けたいのである。街の紙芝居屋さんの紙芝居、紙芝居の藝術的専門家の紙芝居と、子どもが作り、子どもが演出する、眞に子どものものであり、眞に学校のものである紙芝居とは、決して同じものではない筈である。私は、子どもの紙芝居を大に奬勵する。しかし、此の大切な條件を超えることを望まない[25]。

倉橋は、入賞作品の「ボクラノチカヒ」の中に、子どもの内面の表出手段としての紙芝居の有効性を見ている。そして、「子どもが作り、子どもが演出する」紙芝居を教育に自然に取り入れたことを高く評価したのである。

戦後、紙芝居は戦争協力を行ったことに対する批判を受けることとなる。「国策紙芝居」の製作に関わった日本教育紙芝居協会、作家や画家個人の戦争責任の問題は、現在もなお残されているといえるだろう。

倉橋は何を考え、どのような見通しをもって行動していたのだろうか。たとえば当時の『幼児の教育』などに掲載された倉橋の言説を“倉橋の変節”と批判する声もある。時局に応じたふるまいは批判されるものかもしれない。しかし戦争に翻弄される時代にあって、自由主義者としてふるまうことは容易ではなかったであろう。内面では冷静な視点を保ちつづけながら、時を待って、戦後の保育・教育界のあり方を見据えていたのかもしれない。

（3） 教材・教具としての位置づけ

1943（昭和18）年6月号に掲載された、「座談会「学校紙芝居の現状と将来を語る」」[26] は、「學校と紙芝居の問題について、各方面の権威でゐらつしゃる皆様方にいろいろお話を伺ひたい」[27] として開かれた会であり、出席者は掲載順に、中谷千蔵（文部省国民教育局青少年教育課）、倉橋惣三（東京女子高等師範教授）、松永健哉（日本青少年教育研究所所員）、柚木卯馬（明治第二国民学校校長）、赤羽廣雄（青山師範訓導）、平林博（羽田国民学校訓導）、砥上種樹（錦華学院院長）、橋本宏（板橋第五国民学校訓導）、上村英雄（日本教育紙芝居協会編集長）、砥上峯次（日本教育紙芝居協会普及部長）、佐木秋夫（司会・協会常務理事）の名前があげられている。

師範学校、国民学校の教室で紙芝居がどのように使われているか情報交換がなされ、日本教育紙芝居協会の中に設けられている教材委員会で学校における紙芝居の取り扱いをどうしたよいか検討していることも報告された。いずれの立場からも、紙芝居は教育的効果が大きいことが論じられた。しかし、その一方で紙芝居について文部省の規定がないことが問題となった。最後に、話し合いをまとめるよう司会者に促されて、倉橋が発言をしている。

要するにけふのお話は満場一致紙芝居といふものが教具として非常に有効なものであるということがいはれてゐるのですが、

（中略）

そこで教具は教育方法の補助機関であって教師の代用機関ぢやないといふことと、教具は教材それじたいぢやなくて方法の補助機関であるということは申してよかろうと思ふのですが、その方法補助或は補佐機関としての紙芝居の効果は今日皆様の口からはつきり出ましたやうにいふまでもないことであるのでありますが。また恐らく誰もこれに反對するものはないでせうが、若し忌憚なくいふとこの効果をみんなに徹底させて國もどうしても國民学校で使うといゝと示すに至るまでに行かせるためには、紙芝居の教具としての効果の非常に細かい研究は、まだまだ残つてゐるのぢゃないかしらと思ふのです[28]

倉橋は、出席者の発言どおり、紙芝居は教育的に効果の高いものであることを認めつつも、教師に代わるものではなく教具であり、教育方法の補助機関であることを強調している。そして、学校の教室で使うよう主張するには、まだまだ研究が足りないことを指摘している。倉橋の言葉には、倉橋独自の教育観がこめられており、紙芝居の持

つ魅力を利用して安易に教育をしようとしている教育者への警鐘のようにも取れるのである。

> 今日映畫も立派な補助機關として認められてゐるし、また放送も認められてゐるのですが―掛圖は前から認められてゐるのですし黒板に繪を描くことも認められてゐるのですが紙芝居といふものを、そんなに窮屈に考へなくてもいゝのですが、紙芝居獨特のこれに依らざれば不可ないといふ、それ位のところまで一應押詰めて行きたいと思つてゐるのです。（中略）
>
> まァ今夕のようなお話が必ずや紙芝居を少くもラジオ、映畫が施行規則の中に擧げられてゐるが如き位置までにもつて行くことを、非常に促進するといふことを疑はないのです。われわれいつも思ひますことは映畫の時でもはじめから教室に向けて映畫といふものが發明されたならば、あゝ苦労はせずに濟んだらうと思ふ。教育的方面から映畫といふ先入主が出來てゐた。それを破ることで非常に苦心をした。ラジオもやゝそんな感があつたんですから、紙芝居といふものにくつゝいてゐる先入主は紙芝居を無視して紙芝居を論じてゐる人々の先入主、或は紙芝居を使つて見たことのない子どもの前で見せたことのない人々、さうしてたゞ街頭の昔のいろいろ問題になつた紙芝居だけから來てゐるあれとの關係が私は實は裏の方で大きく働いてゐる。これに紙芝居協會からいつたならばどうか知らんですが、私は一つこれからお前達に紙芝居を見せるといはないで、教場で使つて見たい様な氣がするのです[29]。

倉橋は、ここで映画やラジオを例にあげて、街頭紙芝居時代に根付いた先入観を破るためには、教具としての価値を裏づける研究や、制度的な位置づけの必要性を説いている。そして、最後のところで、「もう少し附けさせて頂きますが、どつちにしましても文部省の検定を經ざる紙芝居を、教場で使つてもいゝといふことはいつになつてもなからうと思ひますな。」[30] と述べているのであるが、この言葉をどのような思いで付け加えたのか、気になるところである。この点については、戦争中の倉橋の言動を付き合わせるという作業が必要である。今後の課題としたい。

4．保育教材・教具としての紙芝居

4．1　保育項目「談話」からの展開

紙芝居は、どのようにして保育の場にもちこまれてきたのだろう。

紙芝居が登場した頃の保育内容は、1926（大正15）年公布の幼稚園令にもとづき、遊戯、唱歌、観察、談話、手技の5項目とされていた。

昭和期には、人形芝居やラジオといった新しい教材・教具が取り入れられ、「保育項目」活動はその種類を広げていった。「紙芝居」は主に「談話」の応用に使われ[31]、昭和7、8年頃から多くの園で用いられるようになり、全国に広まっていった（表2、図3）。

当時の教育界に街頭紙芝居に対する偏見が根強く残っていたことは、先に取り上げた雑誌『紙芝居』の座談会にある倉橋の発言に見るとおりであ

表2　弘前幼稚園の昭和十八年の週録（年長組）[32]

週二第					
日七十月四至　日二十月四自					
遊歌唱戯	画図	技手	察観	話談	
鯉のぼり	自由	包厚紙紙	木の芽	紙芝居　三匹の子豚　赤頭巾ちゃん（判読不明） 朗読　鳩と豚 話　幼児の話	予定
三拍子のリズムもよく表わせるやうになった。	ヌリヱ　チューリップもして見た、たいていがぬれた。幼稚園にくる途中見たものをかいた。	自転車をこしらへた。 男の子はなかなかよくやる。 やらなかった。	天気が悪くて木の芽はできなかった。 空を観た。	内容をつかむやうに導きたい。 どうやら話せるやうになった。	実際
				十三日　保育園総会	摘要

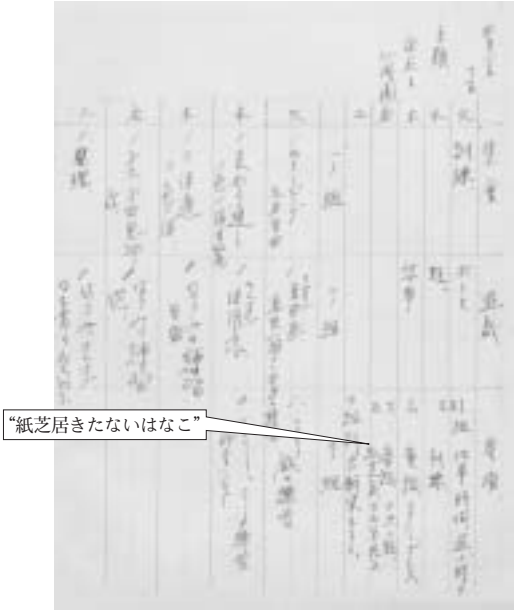

図 3　柳城御器所分園の昭和十二年の保育細目

る。学校教育の現場に、紙芝居が教材・教具として戦中でさえ、なかなか位置づけられなかったことに比べると、保育界の動きは柔軟であったといえる。

ここには、倉橋の「保育項目」観が、影響していると考えられないだろうか。それまでの理解では、「保育項目」は学校の教科目と同様に、幼児に“教える”内容と捉えられていた。しかし倉橋は、保育内容は子どもの自由な遊びから生じるもので、子どもにとっての必然性が重要であり、教育目的からつくりだすものではないとした。そして子どもから生じる興味を既にある文化財を用いて充足させる、そこに保育内容が存在すると考えたのである[33]。倉橋の「保育項目」観は、それまでの理解とは大きく異なっていた。

倉橋が「保育項目」の内容を解釈し直し、「保育項目」の意義自体を新しくした[34]ことにより、多様な「保育項目」活動が推進されたとも考えられる。

4．2　『保育要領』と紙芝居

倉橋が目指していた紙芝居の制度的な位置づけは、保育界においては 1948（昭和 23）年の『保育要領－幼児教育の手引き－』によって実現された。昭和 21 年から 23 年にかけては、「学校教育法」、「児童福祉法」など、新しい教育制度や児童福祉制度が制定され、戦後の幼児教育の基盤が確立した時期である。

『保育要領』は、戦後の新しい幼児教育の方向を示そうとして作成されたわが国最初の幼児教育の手引書だった。連合国軍最高司令部民間情報教育部顧問のヘファナン（Hellen, Heffernan）の指導のもと、倉橋惣三、山下俊郎、坂元彦太郎らの幼児教育関係者と、吉見静江、副島ハマらの厚生・児童福祉関係者らで構成された「幼児教育内容調査委員会」が実際の作成を行った。

『保育要領』において、紙芝居に関する記述は 2 箇所に出てくる。第五章の「幼児の一日の生活：1. 幼稚園の一日」と第六章の「幼児の保育内容：11. 健康保育」である。僅か 2 箇所ではあるが、紙芝居は、保育制度上の保育教材・教具としてはじめて位置づけられたのである。

5．終わりに

本稿では、倉橋惣三と「紙芝居」の関わりについて検討した。

まず、倉橋惣三の著作、倉橋惣三に関する先行研究を基に、紙芝居との関係に焦点を当てを検討し、以下の 3 点を確認した。

1．倉橋が紙芝居に興味関心を抱いたのは 1922（大正 11）年に欧米留学から帰国したころのことで、まだ紙芝居が「立ち絵」のスタイルをとっていたころからであった。
2．倉橋が早い時期から紙芝居に注目した理由は、海外に出ることで強く日本を意識し、日本の子どもへの思いが募ったことに起因している。
3．彼の家庭環境が、倉橋に人形芝居や紙芝居を保育界に取り入れ、広めるような芸術観を育てた。

次に、日本教育紙芝居協会刊行の雑誌『紙芝居』のうち、現存を確認できた第二次世界大戦当時に刊行されたものを資料として、倉橋と紙芝居の関係を調査した。その結果、雑誌『紙芝居』について、歴史的な事実 2 点が明らかになるとともに、記載された記事の検討から、倉橋の紙芝居観が 3 点浮かび上がってきた。

雑誌『紙芝居』に関して、

1．創刊時のタイトルは、『教育紙芝居』であり、1942（昭和 17）年 1 月号から『紙芝居』に改題された。
2．1942（昭和 17）年 1 月当時、倉橋は日本教育紙芝居協会の理事であった。

倉橋の紙芝居観

1．倉橋は、紙芝居に「少國民文化」が持つ普遍性をみていた。
2．倉橋が、「軍事保護教育紙芝居懸賞募集」という形で、戦争協力を行っていた。しかし、そこで、子どもの内面表出手段としての紙芝居の有効性を評価している。
3．教具としての紙芝居の有効性を認め、学校教育に導入するためには、制度的に位置づけることが必要であると、戦争中から主張していた。

さらに、保育教材・教具としての紙芝居の位置づけに関する倉橋の影響力について、以下の 2 点が確認された。

1．戦前から、大正 15 年に交付された保育内容の一項目「談話」の中に紙芝居が位置づけられていることが明らかになった。ここには、倉橋の「保育項目」観が作用していたであろうことが推察される。
2．戦後の教育改革において制定された、『保育要領－幼児教育の手引き－』に保育教材・教具としての紙芝居の記述があるが、「幼児教育内容調査委員会」のメンバーとして作成にかかわった倉橋の影響があったと考える。

以上、本研究の成果をまとめたが、ことに日本教育紙芝居協会刊行の雑誌『紙芝居』を資料にした検討は、先行研究が少なく、紙芝居研究としても大きな成果であると考える。

現存資料が限られてはいるが、雑誌『紙芝居』に記載された記事を、本稿で対象にしたものも含めて、さらに深く読み解き紙芝居についての研究調査を進めることが、今後の課題として残されている。

【注】

1）上地ちづ子.『紙芝居の歴史』東京，久山社，1997，p. 33.（日本児童文化史叢書 15）
2）朝日新聞（2006 年 5 月 1 日付け朝刊）. 遊んで学ぼう「食育紙芝居」県,今日発売／群馬県. p. 29.
東京読売新聞（2006 年 4 月 4 日付け朝刊）. 防犯教材に紙芝居 県警、ホームページに掲載／静岡県. p. 28.
朝日新聞（2006 年 5 月 20 日付け朝刊）. 逆風乗り越え、韓国で紙芝居 きょう、松江の市民サークル／島根県. p. 28.
毎日新聞（2006 年 5 月 24 日付け朝刊）. 紙芝居：フランスで講座 幼児教育へ導入に高い関心／東京. p. 12.
3）遠山昭雄.『はじめよう老人ケアに紙芝居』東京，雲母書房. 2006, 254.
4）鬢櫛久美子，種市淳子.「保育におけるメディアとしての紙芝居：紙芝居通史を中心に」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No. 27, p. 53-67, 2005.
5）森上史朗.「倉橋惣三と児童文化」『子どもに生きた人・倉橋惣三』東京，フレーベル館. 1993, p. 169.
6）倉橋惣三.『子供讃歌』東京，フレーベル館，1965.（倉橋惣三選集 1）
7）紙に描いた絵をめくっていく「平絵」と呼ばれる現在の紙芝居形式になる以前のものであり、竹のくしを付けた紙人形を舞台で動かして演じさせる形式の紙芝居を「立ち絵」と呼んだ。舞台の上で人形をあやつると、それが鏡に映されて立って動くように見える仕掛けの「かがみ」などがあった。
8）前掲 6. p. 247.
9）前掲 6. p. 244-245.
10）倉橋惣三.「まがりかど」『コドモノクニ』Vol. 5, No. 5, 1926.
11）坂元彦太郎.『倉橋惣三・その人と思想』東京，フレーベル館. 1976, p. 70.（フレーベル新書 14）
12）前掲 6. p. 231.
13）倉橋惣三.「人形芝居の話：幼稚園談話會講演の大要筆記」『幼児の教育』Vol. 30, No. 5,

1930, p. 18-23.
14）同上. p. 18.
15）同上. p. 22.
16）前掲 1. p. 64-65.
17）前掲 6. p. 248.
18）「會員の方々へのお知らせ」『紙芝居』Vol. 5, No. 1, 1942, p. 66-67.
19）倉橋惣三.「街の少国民文化：少国民文化の普遍と紙芝居」『紙芝居』Vol. 5, No. 2, 1942, p. 28-29.
20）同上. p. 29.
21）倉橋惣三.「「ボクラノチカヒ」感想：軍事保護教育紙芝居懸賞募集「佳作一席」」『紙芝居』Vol. 5, No. 5, 1942, p. 18-19.
22）「紙芝居の金字塔：軍事保護紙芝居審査に当って」『紙芝居』Vol. 5, No. 1, 1942, p. 34-35.
23）岸利子（佳作一席）.「入賞の感想：この秋このよろこび」『紙芝居』Vol. 5, No. 1, 1942, p. 31.
24）前掲 21. p. 18-19.
25）前掲 21. p. 19.
26）「学校紙芝居の現状と将来を語る：座談会」『紙芝居』Vol. 6, No. 3, 1943, p. 2-13.
27）同上. p. 2.
28）同上. p. 12.
29）同上. p. 12-13.
30）同上. p. 13.
31）内山憲尚.『国民保育要義』東京，東洋図書. 1941, p. 183-187.
32）日本保育学会.『日本幼児保育史』第 4 巻. 東京，フレーベル館. 1971, p. 47-48.
33）倉橋惣三.「保育項目の実際：文部省夏期講習会講習記録」『幼児の教育』Vol. 34, No. 8・9, 1934, p. 53-145.
34）児玉衣子.『倉橋惣三の保育論』相模原，現代図書. 2003, p. 121-134.

Nagoya Ryujo (St. Mary's) College, Annual Report of Studies, Volume 28, 2006

Sozo Kurahashi and *"Kamishibai"*

Bingushi, Kumiko*
Taneichi, Junko*

保育界では、現在のスタイルの紙芝居が成立した昭和初期から、紙芝居が保育に取り入れられていた。戦後は、紙芝居が学校教育から締め出されたことと対照的に、保育教材・教具として制度上に位置づけられ、現在に至っている。

本論では、大道芸にはじまった紙芝居が、保育界に定着した背景に倉橋惣三の影響力があったと推測し、倉橋と「紙芝居」の関わりを検討した。その結果、倉橋が日本教育紙芝居協会の理事であった歴史的事実のほか、倉橋の紙芝居観 3 点が示された。1）倉橋は紙芝居に「少國民文化」が持つ普遍性をみていた。2）「軍事保護教育紙芝居懸賞募集」という形で戦争協力を行っていたが、そこで、子どもの内面表出手段としての紙芝居の有効性を評価していた。3）教具としての紙芝居の有効性を認め、学校教育に紙芝居を導入する上で、制度的位置づけの必要性を戦中から主張していた。また戦後、その実現に寄与していたことが確認された。

キーワード：*紙芝居，倉橋惣三，保育教材・教具（subject matter and teaching instruments of early childhood care and education），児童文化（child's culture）*

Nagoya Ryujo (St. Mary's) College